

東京女子医科大学看護学会第9回学術集会 シンポジウム
「看護教育にリベラルアーツはどのように貢献する可能性を持っているか？」

看護におけるリベラルアーツ—本学卒業生の立場から—

味木 由佳（東京女子医科大学看護学部）

私は学部を卒業後、本院手術室に勤務、本学大学院を経て、現在は基礎看護学の教員をしている、いわば女子医大育ちです。他校で学んだ経験はありませんが、私は本学で学べたことを誇りに思っています。本学では看護だけではなく、人間的な成長につながることもたくさん教えていただいたからだと考えます。

私が在学中に受け取った一番大きなメッセージは、「小手先の人間になってはいけない」、「ステキな看護師になるためには、まずステキな人間にならなくてはならない」ということでした。看護の基礎を学ぶ学生時代こそ、物事を原理から学ぶことの大切さを教えていただいたと思います。看護師には高い人間性が求められる、というのは古くからいらわれていることですが、実践するのは大変難しい課題です。

看護は人間を相手にする職業です。人間の本質を探究することが、看護に深みを増すことになるとして、本学には「人間の本質を問う」「生活している人間の環境」「人間性を育む」という人間を中心に据えた科目群があります。この科目群にリベラルアーツと呼ばれる学問が含まれ、私にとって忘れられない科目がいくつもありました。ここで強調したいのは、教えてもらったのは知識そのものではなく、知るべき世界を見せてもらったことで、人間に対する関心が高められたということです。

大学で教わることは、看護のことだけではありません。職業訓練としてだけでなく、人間への関心を高めることが、看護学部にも求められている側面だと思います。本学のみならず看護学部が教えなければならない内容は増えているのに、過密すぎる時間割を調整しなくてはならないという困難な状況に置かれています。しかし、どのような状況にあっても、看護学部は知識の伝達だけでなく、人間への理解を高める場所である必要があります。学部4年間で人間への関心を高めるためには、教養科目と専門科目が密接に組み立てられる必要があるのではないのでしょうか。
